

〈論 説〉

# 江戸時代の妻の氏

——夫婦別氏——

井 戸 田 博 史

一 はじめに

二 江戸時代の妻の氏——夫婦別氏

(一) 夫婦別氏の実態

(二) 夫婦別氏の原因

(三) 夫婦別氏の機能

三 おわりに

一 は じ め に

(1) 江戸時代の妻の氏は夫婦別氏であった。この夫婦別氏はこの期に始まったのではなく、従前からの制度的慣習であったが、何故に妻の氏は夫・夫家の氏と異なったのであろうか。

江戸時代の妻の氏についての考察を正面からとりあげた研究に、熊谷開作論文「江戸時代の『家』の氏と妻の氏」<sup>(1)</sup>

や大藤修論文「妻の姓の問題——夫婦別姓説をめぐって——」<sup>(2)</sup>があるが、その他はほとんどない状況にある。多くは明治以後の妻の氏を論じる前提として<sup>(3)</sup>か、または概説書のなかで触れられているにすぎない。

これら先学によれば、次のとおりである。江戸時代は身分階級制社会であつたので、氏自体にも階級的性格があつた。氏Ⅱ苗字は、原則として、支配階級であつた武士のものであり、武士身分の特権と武士の「家」を表象するものであつた（氏の身分特権性と家名性）。

家禄をうけた武士の「家」を継ぎ公儀を勤めるのは男子であつた。女子は公的な役儀に就けず、したがって武士の「家」を継ぐことはできなかった。武士の世界は男子の世界であつて、その男子を生むのは「女の腹」であり、ここに女性の存在意義があつた。嫁入りした妻は他家から入家してきた余所者であり、異分子的存在であつた（この意味において、妻を除く狭義の家族概念が当てはまる）<sup>(5)</sup>。

妻は生家の氏を名乗り、夫・夫家の氏にはならなかつた。妻の氏は夫婦別氏であり、妻の氏についての諸法令はなく、慣習法にゆだねられていた。<sup>(6)</sup> 子を生む「女の腹」は大切であり、一妻多妾（本稿でいう妻には妾が含まれている）であれば、子を生む腹に格差をつけることは当然で、腹の出所を示す氏（生家の氏は武士の「家」にとって重要であつた。妻が生家の氏を称するという夫婦別氏は、妻の血統Ⅱ出自の「家」・由緒を表すためであつて、決して妻の個人としての人格・独立を意味するものではなかつた。これは妻の夫・夫家への従属的地位・劣位を表現するものであつた。）<sup>(7)</sup>

百姓町人等の庶民の氏Ⅱ苗字は、特別に許可がある場合を除いて、その公称を禁止されていた。庶民の氏には、①特別に公称を許された公的存在である氏と、②勝手に私称している氏があつた。このいずれにあつても妻の氏は別氏であつたが、公儀・公務に関わりがなかつた妻にとって氏は重要ではなかつたといえよう。名さえ婚姻すれば単に「女房」と宗旨人別帳に記載されることもあつた妻にあつては「〇〇女房△△」「〇〇内儀△△」の表示で十分であつたと

もいえよう。

(2) 本稿は、江戸時代の夫婦の氏が夫婦別氏であった実態とその意義と機能を、主として、氏承継の原理、妻の父子関係、妻の夫家での地位などとの関連で検討することを目的としている。

なお、ここでいう氏は、古代律令制に基づく氏・姓ではなく、氏集団の中から形成された名字、そして後に苗字といわれたものである。<sup>(8)</sup> 本稿では氏を苗字の意味で使用していることをあらかじめお断りしておかなければならない。

(3) 本稿はまことに小論であるが、牧英正先生の御退職記念号に執筆の機会を頂けたことに感謝するとともに、本稿の作成に当たっては前掲の大藤論文に負うところが多く、ここに記して謝意を表する次第である。

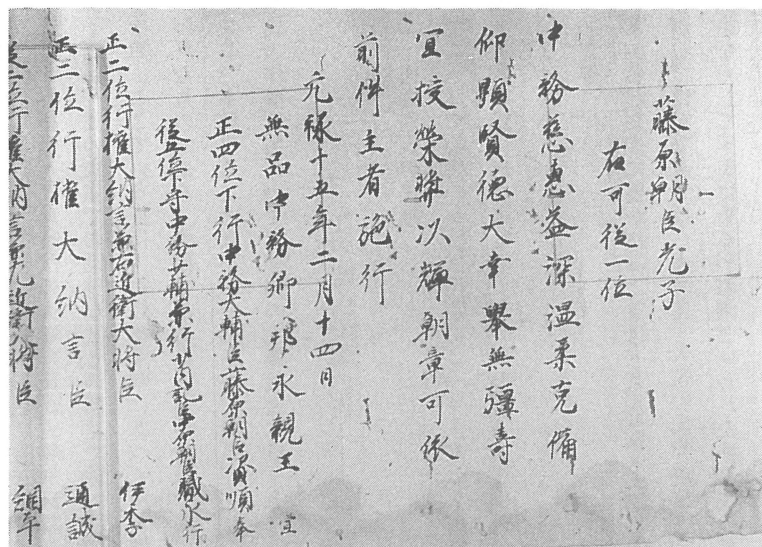
## 二 江戸時代の妻の氏——夫婦別氏——

### (一) 夫婦別氏の実態

(1) 江戸時代の女性は婚姻によって夫家に入家し妻となった。氏を称する身分階層では、妻は生家の氏を捨てず、夫・夫家の氏にはならなかった。いわゆる夫婦別氏であつた。<sup>(9)</sup> このことを①文書、②系図、③墓碑などに記された名前によってみてみよう。

#### ① 文書

妻の名が文書に書かれるときは、「○○室△△」「○○女房△△」のように夫との関係で示されるのが普通である。しかし、位記などでは、夫の氏・夫家の氏ではなく、生家（養女の場合は養家）の父の氏が使われている。たとえば、「氏なくして玉輿に乗る」<sup>(11)</sup>の例といわれた桂昌院の場合は次のとおりである。<sup>(12)</sup> 桂昌院は家光の側室で、綱吉の生母である。京都の八百屋仁右衛門の娘で、名をはじめは「たま」といった（後に光子、宗子、側室になってから秋野、お玉の



写真一 「位記写」(山城国京都平松家文書・国立史料館所蔵)



写真二

方)。後家となった母は二条関白光平の家司本庄太兵衛宗利の家に奉公したが、後に宗利の後妻におさまった。

連れ子であった「たま」は、関白鷹司信房の娘が家光と婚姻するときに、随伴して江戸城に入ることになった。<sup>(13)</sup> 後

に家光の側室となり、綱吉を生んだ。格式を高めるために、光子は前述の本庄家（本氏は藤原）の養女となった。元禄一五年（一七〇二）二月一日に従一位を叙位されたときの位記には、徳川の本氏である源ではなく、養父の本氏藤原を用い「藤原朝臣光子」（写真一）と記されている。<sup>(14)</sup> なお、文書ではないが、永代常灯籠の銘文（法隆寺、元禄七年）に「母儀桂昌院本庄氏」（写真二）と養父の苗字本庄が刻まれている。<sup>(15)</sup>

## ②系図

系図に妻は「妻は〇〇が女」と書かれるのが通例である。なお、母については「母は〇〇氏」「母は〇〇が女」などと記されている。『寛政重修諸家譜』を繙くと、清和源氏義家流の松平（三木）重利では「母は某氏」「妻は長塩又左衛門正家が妻」とあり、その子忠義については「母は正家が女」「妻は細井佐次右衛門勝茂が女」と書かれている。<sup>(16)</sup>

## ③墓碑

江戸時代の夫婦の墓碑は、個人墓（夫婦それぞれの墓が連立していることが多い）あるいは夫婦墓である。この夫婦墓には法名などが連刻されている場合と、二人の氏名などが刻まれている場合とがある。墓に夫婦の氏名が連刻されている場合に、妻の氏が生家の氏となっている事例が洞富雄論文<sup>(17)</sup>によって、つとに紹介されているところである。すなわち、隣村の平松家から洞家に嫁いできた玄祖母「もと」の墓碑には、「平松もと」と生氏が彫られているとのことである。

大藤論文にも、<sup>(18)</sup> 茨城県水戸市堀町（近世の堀村）の事例を分析した貴重なものがある。それによると、夫が「夫家の苗字十名前」となっているのに対して、妻の方は生家の氏を使って「〇〇氏婦人」「暨配婦人〇〇氏」「生家の苗字十

名前」の形式で出自の氏が表示されている。農民にあっても他家から嫁した女性は出自の氏が重視されていたといえる。しかし、夫婦連刻で、夫家の墓地に墓碑が建てられていることは、あくまでも夫家の先祖に加えられたうえでの出自の氏の重視を意味していることに留意しなければならないところである。<sup>(19)</sup>

京都市上京区寺町通今出川上ルにある阿弥陀寺の墓地の例を紹介しておこう。同寺は天文年間（一五三二—一五五四）の創建で、織田家と深い縁があり、天正一〇年（一五八二）の本能寺の変に際して、織田信長・信忠父子や家臣百余名の遺骸を埋葬した寺として有名である。写真三と四は同寺墓地にある墓碑である。（写真三）には「佐々木将監之妻龜子村井氏墓」とあり、佐々木将監の妻である龜子の氏が村井であることを示している。墓碑建立の年月日が不詳であることは残念であるが、この墓碑名は夫婦別氏であったことを示している。

（写真四）は夫婦の墓が連立している事例である。この藤原は本氏であって、苗字は斎藤である（同家の身分階層は不



写真三



写真四

詳)。夫藤原安行の墓碑には「諱安行安善二男母藤井氏」とある。父の苗字は斎藤、母の苗字は藤井であり、いわゆる夫婦別氏である。安行の妻の墓碑には「斎藤安行配本多氏」と彫られてあり、夫婦別氏である。夫安行は明治三六年（一九〇三）、妻文子は同三五年（一九〇二）に死亡している。墓碑の碑文がこの期に刻まれたとすると、ある身分階層にとつての夫婦別氏慣行の根強さを感じることができる。

(2) しかし、文書、系図、墓碑などに夫婦別氏で示されていても、このことが女性自身が常に生家の氏を名乗っていたことを直ちに意味するものではない。「〇〇が妻（女・母）」などと夫（父・子）との関係で自己を表示することがあるからである。<sup>(20)</sup>

なお、このことに関連して、明治期のものであるが、明治民法編纂過程における法典調査会（明治二八年一〇月二一日）で、横田国臣は中国式に碑銘が別氏であっても「果シテ実家ノ氏ヲ何時モ名乗ルカ疑ヒマス」とする。<sup>(21)</sup> 梅謙次郎も、歴史などを漢文で表すと中国流に「妻何何氏」と書くが、これは日本の慣習とは認められず、むしろ日本の慣習は「妻ハ常ニ家族デアル、ソレデ夫ノ家ニ属スルモノデ、何ノ某妻何ト云フ方ガ日本ノ慣習」「強イテ姓ヲ言ヘバ、矢張夫ノ姓ヲ名乗ルト云フ方ガ慣習デアル」としている。<sup>(22)</sup>

## (二) 夫婦別氏の原因——氏の父子承継原理・父子関係の有無——

(1) 本稿では、江戸時代における夫婦別氏は、①氏の父子承継と②父子関係の有無に由来すると考えている。

### ①氏の父子承継原理

(イ)氏は父から子へと父系で承継された。本稿はこの「氏の父子承継原理」がわが国の夫婦別氏の原因の一つと解している。女子の氏も父系によって父の氏を受け継いだのである。<sup>(23)</sup>

(ロ)律令に基づき編製された戸籍の氏は、父系で承継されたことを示している。たとえば大宝二年(七〇二)の筑前国鳴郡川辺里戸籍<sup>(24)</sup>をみると、子の氏は、男女を問わず、父の氏を承継していることがわかる。父物部・母葛野部の子はすべて父の氏・物部を継いでいる(母が妻でなく妾であっても同様である)。また、嫡子物部羊とその先婦(氏不詳)の子の氏は父氏の物部であり、嫡弟物部都牟自の婦物部牧太売には先夫・ト部があり、その間の子の氏は父の氏ト部である。たとえ同籍の戸主が物部であっても、この子の氏は父氏のト部を名乗っている。これら諸事例は氏の父子承継原理を物語っている。

(ハ)この氏の父子承継は平安時代に定着し、以後の氏承継の原理となった。氏の承継には父子関係の有無が重要となる。中世となり、武士の家を表示する名字が形成され、その所領の地や居住の地などの所名を名字とした。はじめは所領の移動などにつれ名字を替えていた。この家名としての名字は、後には世襲され、名字が固定するようになった。その後、名字に字音が通じ、種(たね)とか胤(ちすじ)を意味し子孫を示す苗の字が当てられ、苗字といわれた。氏が父子間で受け継がれたように、名字＝苗字も父子で承継されるようになった。

## ②父子関係の有無

(イ)氏の承継には父子関係の有無が重要となる。夫婦別氏はこの父子関係の存在が大きく関係してくるので、以下において妻の父子関係にふれる。ここでは妻と養女とを対比して考察する。妻も養女も他家からの入家ということでは同じであるが、父子関係の有りに相違がある。夫の父と親子関係を結ばない妻と、養父と父子関係を結ぶ養女とは、入家した家の氏との関係で異同が生じるのである。

(ロ)妻も養女もともに、原則として、他家からある家に入ってくる。この点では両者は同じである。女子は夫と婚姻することによって入家し妻という地位を得るが、妻は夫の父と親子関係を結ぶわけではない。父子関係はあくまで



も生家の父との間で続いているのである。したがって、氏の父子承継原理から、妻の氏は夫の氏すなわち夫家の氏にはならないで、妻は生家の氏を名乗ったのである。このことから夫婦別氏となった。

これに反して、養女は養家の父と養親子関係を結ぶことによって、養家に入り子の地位を得る。したがって、養女は養父との父子関係によって、養父の氏すなわち養家の氏を称することになる。例えば、死亡した息子の妻は娘という子の地位にないので、亡息子の妻は直ちに婿養子をとれず、いったんその妻を養女とし、子の地位を取得させてから、婿養子を迎える必要があった。<sup>(25)</sup>

妻と養女との相違の事例をみると、たとえば、文政十一年（一八二八）二月四日の本成寺文書に「養子は養父、女房は夫同寺たるべく、実家菩提寺之旦那に居置儀は不相成事」とある。養子と妻の帰属が、それぞれ養父、夫となっていたことが分かる。なお、明治七年（一八七四）九月四日左院議案は、<sup>(27)</sup>「養女ト妻トハ軽重ニ因テ權衡ヲ異ニスルニ非ス、養女即養子也、養子ハ実子ト同一ノ權アリテ其家ヲ繼嗣スル者也、妻ハ配偶ナリ配偶シテ其夫ヲ助クル者ニシテ一己ヲ以テ其家ヲ繼嗣スル者ニ非ス、此原則ニ於テ異アル所以ナリ」と、両者の相違を説明している。明治期のものであるが、江戸時代にも当てはまるといえるよう。

(2) わが国においては明治民法が施行されるまでは、各自が父より承継した氏は、婚姻しても変えることはなく、したがって、夫婦は別氏であった。ただし、わが国には同姓不婚の禁忌がなかったため、同氏の夫婦が存在した。この同氏夫婦は婚姻による改氏によるものではなく、それはたまたま各自の氏が同じ呼称であった結果にすぎない。

### (三) 夫婦別氏の機能——出自の腹の表示・妻の劣位の表示——

(1) 江戸時代の夫婦別氏はどのような機能を持っていたのであろうか。江戸期の夫婦別氏には、①出自の腹を表

示する機能と、②妻の従属・劣位を表示する機能があった。すなわち、

①出自の腹の表示

(イ)家禄が与えられることで、武士の「家」は存続した。その「家」を継ぎ、忠勤を励むのは男であり、武士社会は男中心の世界であった。とはいえ、その男を生むのは女であった。大切な男の子を出生するという意味においては女が存在意義があった。

正室のほかに側室が認められていた。このように一妻多妾であれば、子を生む腹も複数となる。「腹は借物、武士のたね」とはいわれたけれども、子を生む腹が複数となれば、その腹に格差がつけられた。家督は「御目見」が済んだ嫡出の長男が相続した。正室に男子がなく、妾腹に男の子が生まれたときは「追而妻腹男子出生候ハハ、次男ニ可致」とされた。このように妾腹の子と嫡出子の間には大きな差別があったのである(庶出子に嫡出子の身分を与えるために、嫡母の養子の制度が認められた)。

このように、子がどの腹から出生するかが重要であった。すなわち、腹の出自が大切となり、その出自の腹を示すものが女の生家の氏であった。したがって、女が生家の氏を夫家で名乗ることに意味があった。女が婚姻しても夫・夫家の氏に変わらず、生家の氏を名乗るという前代からの慣習は、江戸時代にあっても有用であり、なら疑問もなく自明のものとして受け入れられたといえる。

(ロ)夫婦別氏に出自の腹を表示する機能があったとする見解は、前掲の熊谷論文・山中論文をはじめ多くの論考でとられているところである。この見解は、明治民法編纂過程において、「法典調査会」の委員であった横田国臣も「母ハ何々氏ト云フコトヲ書タノハ其出所口ト何処カラ来タト云フコトヲ明カニスル為メサウスル」と述べている。<sup>(31)</sup>

②妻の従属・劣位の表示

(イ)妻が生家の氏を称したのは、妻の血統すなわち出自の「家」を示すためであって、夫婦別氏は妻の個人としての人格・独立を表すものではなかった。夫婦別氏は、武士の「家」の跡継ぎを生む腹である妻の従属的地位を表徴するものであった。<sup>(32)</sup>ところで、江戸時代の妻の氏は妻の従属的・劣位的な地位を示す機能を果たしていたが、その妻の夫家における地位には、次の二つの側面があった。(Ⅰ)妻の血統・出自を重んじた生家性と、(Ⅱ)夫家への帰属・夫家での存在を中心とした婚家性という二つである。すなわち、

(Ⅰ)生家性(血統性・出自性) 血統の点からみれば、妻は夫家の血族でなく非血族である。家族は血族の者で構成されているとすれば、このなかには妻は含まれていないことになる(山中論文の妻を除く「狭義の家族概念」が当てはまる)。

(Ⅱ)婚家性 妻の夫家への帰属、夫家での存在という点からみれば、妻は夫家の非血族ではあるが、妻は「厄介」とはされないで家族の一員であった。当主の兄弟姉妹、伯叔父母、甥姪の傍系親族が、たとえ血族であっても「厄介」とされたのとは異なるのである。『農家重宝記』も妻を「家に付く」とする(山中論文の妻を含めた「広義の家族概念」が当てはまる)。安永九年(一七八〇)に「宗門之儀者、夫婦同宗ニ可相成」「夫婦別宗を不相成、夫之宗門ニ可相成候」といわれたように、複檀家制が否定され一家一寺制が確立してくると、妻の婚家への帰属性が一層明確になってくる。<sup>(34)</sup>

(ロ)前述のように、妻には婚家での一体性があつたとしても、それは夫・夫家へ従属するものであり、夫家での妻の地位は劣位であつた。「夫ニ順ひ候身分」<sup>(35)</sup>「夫の取計ニ可申身分」といわれたように、妻は夫に従う義務があつた。<sup>(36)</sup>江戸時代では、妻の財産上の権利が低下し、さらに武士の「家」とどまらず、庶民の「家」においても家長の支配権が強まり、妻は夫家の家長権に服することになった。妻の財産権の低下と家長権の存在によって、妻の夫家での地位は従属・劣位となった。この妻の従属・劣位の地位を表すものが、妻の氏であつた。しかし、留意すべきことは、

妻が夫家で生家の氏を称することが妻の従属的地位を表す機能を持っていたとしても、夫家で妻が生家の氏を称することが妻の夫家での従属的地位をもたらしたのではないのである。

このように、江戸時代の妻の夫家における地位は、妻の財産上の権利や家長権の有り様によって、夫・夫家に従属し、劣位の存在となった。このために江戸時代の夫婦別氏ができたのではないが、夫婦別氏はこの妻の夫・夫家への従属・劣位を表象する機能を果たしていた。家長の支配権は庶民に至るまで強まったと解されている。妻は夫家の家長の一元的な支配に服し、夫家へ従属した（この意味では広義の家族概念があてはまる）。

（2）氏は武士などの身分的特権と武士の「家」の資格を示す意義があり、男子にとつては意義があつた。しかし、夫家において劣位にあり、また、妻の活動が家の内部に限定され、公的・社会的な役割がほとんど認められなかった妻にとつては、氏が出自に基づく生家の氏であらうと夫家の氏であらうと、あまり大きな意味はなかったのではなからうか。妻の公的・社会的な対外的活動がなければ、妻の氏が意識される必要はなかったといわざるをえないからである。<sup>(37)</sup>

### 三 おわりに

（1）本稿では、江戸時代の妻の氏を以下のように解している。①江戸時代の氏は、武士身分の特権と武士の「家」を表象するという機能があつたが（氏の身分特権性と家名性）、その氏は父から子へ父系で承継された（氏の父子承継原理）。氏の父子承継原理によって、女子も生家の氏を父から承継した。②女子は婚姻によって夫家で妻という地位を得ることになった。女子が夫家において妻という地位を得ても、それによって夫との間に配偶関係は生じたが、夫の父と父子関係を結ぶのではなかった。父子関係はあくまでも生家の父との間に続いていることになる。したがって、氏の父

子承継原理から、妻の氏は夫・夫家の氏にはならず、生家の氏を称した。このことによって、江戸時代の夫婦の氏は別氏であったのである。

(2) 江戸時代の妻の夫家における地位には、(イ)妻の血統・出自を重んずる生家性と、(ロ)妻の夫家への帰属・夫家での存在からみた婚家性の二つの側面があった。妻は夫家の非血族ではあるが、本体の家族であり、いわゆる「厄介」とはされなかった。妻は家につく存在であった(この場合の妻の地位は婚家性である)。

(3) このような存在であった妻の氏には、①出自の腹と、②妻の従属・劣位の地位を示す機能があった。

①江戸時代には、正室のほかに側室が認められていた。一妻多妾が認められ、子を生む腹が複数となれば、その腹に格差がつけられた。子はどの腹から出生するかが重要となった。腹の出自が大切であり、その大切な出自の腹を示すものが、女の生家の氏であった。したがって、夫家で妻が生家の氏を称することに意味があったのである。

②妻が家につく存在であり、妻は婚家での一体性があったとしても、妻の財産権の低下と家長権の存在によって、

妻の夫家での地位は従属・劣位であった。この妻の従属・劣位の地位を表徴する機能が、妻の氏にはあったのである。

(4) なお、参考までに、庶民の氏にふれて結びとしたい。享和元年の禁令<sup>(38)</sup>が示すように、庶民は氏の公称が原則として禁じられていた。しかしその例外として、庶民にあつても、役儀や奇特な行為によって、氏の公称が領主権力から許されることがあった。このような公称許可の氏のほかに、庶民が勝手に私称しているものも存在していた。これら私称の氏は公称はできなかったが、なかには由緒があり、共同体内での家格を表象するものもあった。

庶民の公称許可の氏は、それ自体が公的存在であり、幕藩封建体制下の家格・由緒を示すものであった。したがって、公称許可の氏は公的存在であったので、それを公的に名乗れるのは当主を中心とする男子であった。公的な活動が認められていなかった女性には、氏は無縁の存在であった。この場合の妻の氏も別氏であったが、公儀・公務に関

わりがなかった妻にとって氏は重要ではなかったといえよう。「〇〇女房△△」「〇〇内儀△△」の表示で十分であった。

氏の公称が許可されていない庶民は、農民にあつては百姓名があり、町人には屋号があつた。百姓名は検地帳や宗  
 旨人別帳に記載され、公儀名としての公的品格を持つようになった。<sup>(39)</sup> 名請地は代々相伝し、耕作することが公認され、  
 「家」が形成されてきた。「家」の名である百姓名が襲名されるようになった。代々襲名されてきた通り名は百姓の「家」  
 の同一性を示す標識であり、この襲名慣行は農民にとっては「家名」相続といえた。<sup>(40)</sup> 農民には苗字の公称が許されて  
 いなかつたので、家名(苗字)相続の觀念はなかつたが、通り名襲名慣行はその代用であつた。<sup>(41)</sup>

この家名としてのこれら通り名は、女性が当主となつたときでも、男名前であるその「家」の通り名で、太郎兵衛  
 後家〇〇のように用いられた。<sup>(42)</sup> 女当主は公的・社会的の場で、その「家」の正式な代表者として認められていなか  
 ったからである。<sup>(43)</sup>

(5) 明治以降の夫婦の氏については、「夫婦の氏——明治民法施行前を中心として——」(『現代社会と家族法』日本  
 評論社、一九八七年、注(3)にある『家族の法と歴史』第三章として再録)、「夫婦別氏論」(『家族の法と歴史』第四章)、「選  
 択的夫婦別氏制導入をめぐる」(日本生活文化史学会『生活文化史』三三三号、一九九八年)、共著『氏と家族——氏(姓)  
 とは何か——』(『夫婦別氏か夫婦別姓か』『妻は異姓の人』『戦前の『家』制度と夫婦の氏』『戦後の民法改正と夫婦の氏』の章  
 を執筆、大蔵省印刷局、一九九九年)として、すでに発表しているので参考にして頂ければ幸いである。

(1) 熊谷開作『日本の近代化と「家」制度』(法律文化社、一九八七年)一八四頁以下。なお、同『婚姻法成立史序説』(酒井書  
 店、一九七〇年)第三章夫婦の氏、一二二頁以下、同『歴史のなかの家族法——婚姻を主題とする——』(酒井書店、一九六〇

年)第二章夫婦の氏、七〇頁以下、同「家族法(法体制準備期)」(鶴飼信成・福島正夫・川島武宜・辻清明編『講座 日本近代法発達史3』勁草書房・一九五八年・七五～七八頁)参照。

- (2) 大藤修『近世農民と家・村・国家——生活史・社会史の視座から——』(吉川弘文館、一九九六年)妻の姓の問題、一七九頁以下、なお、同「近世における苗字と古代的姓氏」(黒木三郎・村武精一・瀬野精一郎編『シリーズ家族史③ 家の名・族の名・人の名』三省堂、一九八八年、八五頁以下)参照。

- (3) 山中永之佑『日本近代国家の形成と「家」制度』(日本評論社、一九八八年)二四五頁以下、山中永之佑・向井健・利谷信義「学会動向」戦後における家族法史研究の問題点——その回顧と展望』(『法制史研究』第一三三号、一九六三年、二〇一～二〇三頁)、洞富雄『庶民家族の歴史像』(校倉書房、一九六六年)一八七頁以下、神谷力「妻の「所生ノ氏」について」(『社会科学論集』愛知教育大学、一九八〇年、一～六頁)、廣瀬隆司「明治民法施行前における妻の法的地位」(『愛知学院大学論叢法學研究』第二八巻第一・二号、一九八五年、一～五一頁)、井戸田博史「家族の法と歴史——氏・戸籍・祖先祭祀——」(『世界思想社』一九九三年)七〇頁以下、同「家」に探る苗字となまえ』(雄山閣出版、一九八六年)一四三頁以下。

- (4) 滝川政次郎『日本法制史』(角川書店、一九五九年)一九四頁、石井良助『日本法制史概説』(創文社、一九四八年初版、一九七一年改訂版)一八八頁、大竹秀男「家」と女性の歴史』(弘文堂、一九七七年)一三三頁、高柳真三「明治前期家族法の新装」(有斐閣、一九八七年)四三六頁(なお、同「明治家族法史」法學理論編83、日本評論社、四九頁参照)など。

- (5) 山中前掲書二五四頁。

- (6) 高柳前掲書四三六頁。

- (7) 山中前掲書二五七頁。

- (8) 氏・姓・名字・苗字などは、それぞれ歴史的意義を異にしていたが、江戸時代ではそれらは混用されることが多かった。江戸時代には「苗字帯刀」といわれたように、苗字が一般に使われた。江戸時代は、氏を姓ともいい、姓が氏を表示するようになると、苗字を氏に当てることもあった。苗字は氏を否定し、改めたものではなかったので、古代的な氏がなくなっただけではなかった。本稿では武士階級を中心に述べている。なお、井戸田前掲書「家」に探る苗字となまえ』六七頁以下参照。

- (9) ただし、ここで注意しなければならないことは、江戸時代の妻の氏がすべて夫婦別氏であったかということである。大藤前掲書『近世農民と家・村・国家』(一七九頁)は「近世において妻がどちらの姓を称していたかを史料的に確認することは難し

いのが実情である」と慎重論を唱え、熊谷前掲書「日本の近代化と「家」制度」(二二九頁)も夫の氏を名乗った梁川紅蘭の幕末の事例を紹介している。この点については、稿を改めて論ずる予定である。

(10) ただし、婿養子は養父と親子関係を結び養家の氏になるので、この場合は夫婦同姓となる。

(11) 角田文衛「日本の女性名(中)」(教育社、一九八七年)一八〇頁。

(12) 「柳営婦女伝二」(『徳川諸家系譜第一』統群書類従完成会、一九七四年、二二八頁以下)。

(13) 家光の側室・於万之方(六条宰相藤原有純の娘)の縁故によって奥勤めをし、綱吉を生んだとの説がある(前掲書『徳川諸家系譜第一』四五頁)。

(14) 大藤前掲書一八〇頁、なお、『徳川実記四五』の元禄一五年三月九日の項参照。

(15) 大藤前掲書一八五頁。

(16) 『新訂寛政重修諸家譜第一』(統群書類従完成会、一九六四年)二三頁。

(17) 洞前掲書一九〇頁、なお、同「明治民法施行以前における妻の姓」(『日本歴史』第一三七号、六二頁)参照、大藤前掲書一八一頁。

(18) 大藤前掲書一八一―一八五頁。

(19) 大藤前掲書一八五頁。

(20) 大藤前掲書一八五―一八六頁。

(21) 『法典調査会 民法議事速記録五』(日本近代立法資料叢書5、商事法務研究会、一九八四年)明治二八年一〇月二二日の第一二七回記録、五九四頁。なお、洞前掲書一九〇頁で、この説を法律家の誤判のようであると批判している。

(22) 梅謙次郎『民法講義』(有斐閣書房、一九〇一年)一一―一二頁。なお、前掲書『法典調査会 民法議事速記録六』二七一―二七七頁、井戸田前掲書『家族の法と歴史―氏・戸籍・祖先祭祀―』八七―八八頁参照。

(23) 氏の父子承継原理は、大化元年(六四五)八月庚子条の「男女之法」にある良人法「良男良女共所生子、配其父」の父系主義に淵源するとされる。これによって子は父の氏を称した。律令制下では、ウジ名と狭義のカバネを総称して「姓」とも表示したが、この「姓」は父から子に承継されるのが原則であった(大竹前掲書四三頁、吉田孝「古代社会における「ウジ」」「日本の社会史」六卷・岩波書店・一九八八年・五四―五五頁、瀬野精一郎「日本における「氏」の残滓」前掲書『シリーズ家族



史③ 家の名・族の名・人の名」二八九頁、関口裕子「日本古代家族の規定的血縁紐帯について」『古代史論叢 中巻』吉川弘文館・一九七八年・四六五頁。

(24) 『大日本古文書 卷之二』(東京帝国大学、一九〇一年初版、一九七七年覆刻版) 一〇七―一〇八頁。

(25) 文化八年(一八一二)六月の大目付伊藤河内守への問合付札に「嫡子死去後、姫を養女ニ不致、智養子相願候義は、御家ニ無之儀ニ付、難及挨拶候」とある(中田薫『法制史論集』第一巻・岩波書店・一九二六年初版・一九七〇年版・四〇四頁、高柳真三「徳川時代の封建法における親類の構成と意義」石井良助編『中田先生還暦祝賀法制史論集』岩波書店・一九三七年・一〇六―一〇七頁、大竹前掲書三二―三三頁)。

(26) 長谷川正観『宗教法概論』(有信堂、一九五六年) 一三〇頁、高木宏夫「宗教法(法体制準備期)」(鶴飼信成・福島正夫・川島武宜・辻清明編『講座日本近代法発達史7』勁草書房、一九五九年、二五頁)、竹田聰洲「日本人の「家」と宗教」(評論社、一九七六年)二二四―二二五頁。

(27) 廣瀬隆司前掲論文一六頁。

(28) 前掲書『徳川禁令考』前集第四、二六六頁、二三三―三三三號。大竹論文は「嫡出男子の出生を解除条件」とする(『講座』家族 5 相続と継承)弘文堂、一九七四年、二九頁)。

(29) 熊谷開作前掲書『日本の近代化と「家」制度』一八八―一八九頁。

(30) 山中英之佑前掲書『日本近代国家の形成と「家」制度』二五六―二五七頁。

(31) 前掲書『法典調査会民法議事速記録五』五九四頁。

(32) 山中前掲書『日本近代国家の形成と「家」制度』二五七頁。

(33) 荒井顕道編『牧民金鑑』下巻(刀江書院、一九六九年) 一八〇頁。

(34) 大竹秀男前掲書一三三頁、藪田貫「女性史としての近世」(校倉書房、一九九六年) 二二二頁、圭室文雄『江戸幕府の宗教統制』(評論社、一九七一年) 二〇九頁以下。

(35) 司法省調査部『御仕置例類集 第一輯古類集四』(司法資料別冊第二二號、一九四三年) 一九九頁。

(36) 大竹秀男前掲書一三四頁。

(37) 熊谷開作前掲書『日本の近代化と「家」制度』一八七頁、大藤前掲書一七九頁。なお、廣瀬隆司前掲論文(二五頁)は明治

民法施行前についてであるが、庶民では旧士族階級などほどに氏は意識されず、妻の氏はそれ以上に意識されていなかったと指摘している。

(38) 享和元年(一八〇二)七月一九日の禁令によれば、

百姓町人苗字帯刀之儀ニ付御触書

松平伊豆守殿御渡

百姓町人苗字相名乗致帯刀候儀、其所之領主地頭より差免候儀ハ格別、用向等相達候迎、御料所ハ勿論、地頭之者より猥ニ苗字を相名乗らせ帯刀致させ候儀ハ有之間敷事ニ候間、堅可為無用候。右之通可被相触候

(法制史学会編『徳川禁令考』前集第五、創文社、一九五九年、一九〇頁)。

(39) 大藤前掲書六三頁。

(40) 大藤前掲書第二章第二節。

(41) 石井良助『長子相続制』(法學理論編84、日本評論社、一九五〇年)一〇二頁、豊田武『苗字の歴史』(中央公論社、一九七一年)一三九頁。

(42) 大藤前掲書八三頁、二五三頁。大竹前掲書二〇六頁。

(43) 大坂三郷で、寡婦や娘による「家」相続すなわち「女名前」の制が認められていたが、これも「女名前之分」は毎月改められ、適当な男に「早速切替」することが求められていた。これらをもても女性の公的・社会的活動が制約されていたことがわかる(中笠喜雄『近世大坂町人相続法』嵯峨野書院・一九七六年・二一―二五頁・二九〇頁・二九一頁、『大阪市史 第三卷』清文堂・一九一一年初版・一九七九年復刻版・二八一頁、長野ひろ子『幕藩法と女性』『日本女性史 第三卷近世』東京大学出版会・一九八二年・一七〇―一七一頁)。